



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | メルロ＝ポンティの空間論  |
| Author(s)    | 家高, 洋   |
| Citation     | 大阪大学, 2011, 博士論文  |
| Version Type |   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/58539">https://hdl.handle.net/11094/58539</a>   |
| rights       |   |
| Note         | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

|               |  |
|---------------|--|
| 氏 名           | い え 家 高 ひろし 洋  |
| 博士の専攻分野の名称    | 博 士（文 学）   |
| 学 位 記 番 号     | 第 2 4 7 9 8 号  |
| 学 位 授 与 年 月 日 | 平 成 23 年 3 月 25 日                                      |
| 学 位 授 与 の 要 件 | 学位規則第4条第2項該当   |
| 学 位 論 文 名     | メルロ＝ポンティの空間論   |
| 論 文 審 査 委 員   | (主査)<br>教 授 上野 修<br>(副査)<br>教 授 浜渦 辰二 立命館大学文学部教授 加國 尚志 |

## 論 文 内 容 の 要 旨

概観。本論文は、フランス現象学のモーリス・メルロ＝ポンティ(Maurice Merleau-Ponty 1908-1961)の哲学を空間論を軸に読み直し、主体もろとも自らを構成する〈構成的空間〉概念へと向かう思想発展のダイナミズムとして解明しようとする試みである。第1部では前期メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』の空間論を捉え直し、従来の時間性に基づく解釈とは異なる空間論の可能性を示す。第2部では『知覚の現象学』の問題点の「解決」を、彼自身の中期言語論をもとに検討する。第3部では『見えるものと見えないもの』を中心に後期メルロ＝ポンティの空間論を取り上げ、それを〈構成的空間〉という考え方として理解する。次に詳細を見る。

第1部「自己構成する空間」。第1章「奥行き」では、主に『知覚の現象学』第2部「空間」B「奥行き」が取りあげられる。メルロ＝ポンティの奥行き把握の説明は主体が対象物へ到達するであろう時間の導入によってなされるが、このことがすでに視野そのものの構造化を暗黙に前提していることが指摘される。第2章「自己構成する空間」では『知覚の現象学』第2部「空間」A「上下」が取りあげられる。ストラットンの逆さめがねの実験に関するメルロ＝ポンティの考察を分析し、逆転した視野の正立回復は主体の構成によるものではなく視覚的空間自身の持つ「力」と主体との相互関係によることが明らかにされる。この相互関係は〈自己構成的空間〉と名づけられ、以下これが問題とされる。第3章「空間の中心設定」では『知覚の現象学』「空間」C「運動」と第3部「時間性」などが取りあげられる。メルロ＝ポンティの「運動の相対性」の考察をもとに空間の中心設定が主体から対象へと移る転換現象が分析され、諸部分の相互包含的關係という視覚的空間の基本的構造が取り

出される。

第2部「『知覚の現象学』の問題点と中期メルロ＝ポンティの言語論」。第1章「『知覚の現象学』の問題点」では前期メルロ＝ポンティの問題点が彼自身の反省に従って洗い出され、空間の「構成」が結局意識主体の投企作用に基づけられて観念論的な論述を超えられなかったことが指摘される。第2章「中期メルロ＝ポンティの言語論」では、その解決が、ソシュール言語学の示差的・対立的・相関的システムと類比的に「脱中心化と再中心化」によって生成するシステムとして空間を考えることで可能になったと跡づける。

第3部「後期メルロ＝ポンティにおける空間論」。第1章「転換可能性と空間」では、後期思想の中心概念の転換可能性(réversibilité)が空間論的な構造を持っていることが示される。第2章「視覚的空間の構造」では中期の言語論をもとに、〈構成的空間〉の内的な構造がソシュールの「示差的で対立的なシステム」として解明される。運動知覚は見られている各々の部分が自らを超えて他の部分へと侵入し合う「浸食」によって産み出されるが、それはシニフィアン間の側面的関係において意味が産み出されるのと類比的であるとされる。第3章「身体と空間」はストラットンの実験を再び取りあげ、視野の正立回復は身体の見えている部分の他の部分への浸食によること、そのためには視野空間の見えている部分が予め自分以外のすべての部分を包含するような構造がなければならないことが明らかにされる。晩年のメルロ＝ポンティの強調する可視性(Visibilité)は、視覚的世界と身体の諸部分のこのような相互包含的で相互浸食的な関係によって可能となるとされる。

結論部は空間論と自己論との関係を示唆する。前期の自己投企的な作用の中心という自己論にとって代わるものとして、空間が主体を「介して」自己構成するということと主体が空間に「おいて」自らを構成するというのが一つの事柄として生じているような、新たな自己論の可能性が示唆される。

## 論文審査の結果の要旨

従来のメルロ＝ポンティ研究は『知覚の現象学』の諸問題を超越論的な主観性の自己構成としての時間性の問題として解釈するのが主流であった。本論文はこのような解釈図式を批判し空間論を軸に読み解こうとする独創的な試みであり、従来の超越論的哲学＝時間論という解釈枠を乗り越える大きな意義を有している。超越論的哲学から存在論へ、というメルロ＝ポンティの哲学の歩みを構成的空間の概念によって明確にした点で、メルロ＝ポンティ哲学の研究に重要な一石を投ずる論文であると言える。

ただ叙述形式として、ストラットンの実験に始まりストラットンの実験に終わる循環的な議論構成が見通しの悪さをもたらしている嫌いがないわけではない。また原テキストに内在する解釈だけでなく、空間論の歴史への目配りや、近代科学に対するメルロ＝ポンティの批判意識の哲学史的位置づけも欲を言えば欲しいところである。とりわけ本質的な問題は「自己構成」する〈構成的空間〉という本論文の中心概念に関わる。「自らを構成する空間」と言われるその「自ら＝自己」は知覚主体の自己を含みうるのか疑問である。はたして自らを構成する構成的空間という概念は「空間の自己構成と主体の自己構成は本質的に絡み合っている」という事態を首尾よく言い当てているであろうか。また中期思想におけるソシュール構造主義言語学の影響が決定的なものとして重視されるが、その必然性は必ずしも明らかではない。まず言語シニフィアンによる意味の産出と視覚的知覚における意味の産出とを同日に論じうるかどうかが自明でないし、また現象学で用いられる「自らを構成する」(se·constituer, sich konstituieren)という再帰的表現はもともと能動でも受動でもない中動相を表わしており、この中動的特徴を言うためにソシュールの構造主義言語学への参照が不可欠

であったとは必ずしも言えないからである。加えて、構造主義的概念の適切性という問題がある。ソシュールの示差的システムは要素の特異性を容れないが、問題となっている空間システムは何らかの仕方で「知覚の主体」としての「私」の特異点として組み込んでいなければならない。そうした構造は明確にされないままである。この点については、同じように構造主義言語学を参照しながらも主体を逆説的な特異点として組み込む構造を提示した同時代のジャック・ラカンとの突き合わせがあつてしかるべきであつただろう。いずれにせよ、メルロ＝ポンティのとりわけ後期思想の詩的とも言える記述スタイルの理解に構造主義的概念がそぐわしいかどうか問題は残る。

しかしこのような難点はむしろ斬新な解釈が孕むそれ自身哲学的な議論に値する問題性であり、本論文の独創性をいささかも削ぐものではない。本論文はメルロ＝ポンティ解釈史に対してのみならず、現象学の「構成」概念に対して根本的な問題提起を行っており、従来の基づけ主義的な超越論的哲学への批判を素描する試みとして大きな意義を持っている。空間論を軸に据えた独自の解釈として今後のメルロ＝ポンティ研究のひとつの参照点となるであろうことは間違いない。よって本論文を博士(文学)にふさわしいものと認定する。